

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 土 屋 マ チ

論 文 題 目

双極Ⅱ型障害の臨床心理学的アセスメント
—ロールシャッハ法と TAT のテスト・バッテリーの有効性—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 森田美弥子

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 松本真理子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 河野 莊子

論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

本研究は、気分障害の中で特にうつ病との鑑別診断が難しいとされている「双極Ⅱ型障害」に注目し、ロールシャッハ法と主題統覚検査（TAT）のテスト・バッテリーによる臨床心理学的アセスメントの有効性を検討することを目的としている。

双極Ⅱ型障害は、うつ病相に軽躁病エピソードを併せ持つ疾患で、1994年に初めてDSM-IVに登場した疾病概念である。うつ病エピソードの時期が長い症例も多く、軽躁病エピソードが見逃され、単極性のうつ病と誤診されやすいが、高揚気分が不安が混じったり、沈んだ気分が衝動性が混じるといった、うつ症状と軽躁症状が同時に存在する混合状態が起りやすく、多彩な病態像を示すため、早期に的確なアセスメントを行うことの臨床的重要性が指摘されている。

精神科臨床における心理アセスメントとしては、ロールシャッハ法に代表される投射法が用いられているが、先行研究の中には、うつを主訴としながら、各心理検査が持つうつ病の診断基準では十分にとらえられない事例報告などもあり、単独の検査では判断が難しい病態の存在が示唆された。論文申請者は、ロールシャッハ法とTATでは双極Ⅱ型障害の病態が異なった表れ方を示す点に着目し、これら2種の検査をテスト・バッテリーとして用いることを検討し、双極Ⅱ型障害の有効な心理アセスメント方法を提案している。

第1章では、先行研究を概観し、双極Ⅱ型障害についての精神病理学的研究の流れを概観し、鑑別診断の重要性を指摘したうえで、その方法としてロールシャッハ法とTATによるテスト・バッテリーの意義を論じ、本研究の目的を示した。

第2章では、双極Ⅱ型障害と診断された2事例をもとに、ロールシャッハ法とTATそれぞれにどのような特徴が現れるかを詳細に検討した。その結果、ロールシャッハ法においては、主観的認知、作話的反応、恣意的思考といった、統合失調症やパーソナリティ障害の可能性も考えられる病理的特徴が見られたのに対し、TATでは、過剰な投射や逸脱した認知・思考は見られず、抑うつ気分を基調としたストーリーが主であった。このように、両検査によって捉えられる病態像には不一致が生じており、それを双極Ⅱ型障害のアセスメントに利用できる可能性を論じた。

第3章では、同様の現象が他の気分障害でも見られるのかどうか、単極性うつ病3名、双極Ⅰ型障害（躁状態の事例2名とうつ状態の事例1名）と、双極Ⅱ型障害6名との比較検討を行ったところ、単極性うつ病と双極Ⅰ型障害においては、ロールシャッハ法とTATに示される病態像に不一致は見られなかった。双極Ⅱ型障害にのみ生じるこの現象を「病態のズレ現象」と名付け、その背景に「軽躁」に対する両検査の感受性の違いが影響していると考えられることを考察した。

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

第 4 章では、統合失調症 5 名のロールシャッハ法と T A T について検討し、それぞれの検査が示す病態像は共通した特徴が見られ、「病態のズレ現象」は生じないことが確認された。

第 5 章では、軽躁の影響を検討するため、同一事例に臨床症状が軽快変化した時期に 2 回目の検査を実施した双極 II 型障害 2 名について、再検査法による比較検討を行った。その結果、ロールシャッハ法においては、軽躁が強い状態では主観的で恣意的な反応やそれに伴う形態水準の低下などが見られ、軽躁が弱まると落ち着いた外界認知が可能になるという変化が示された。T A T においては、軽躁が強い状態では、物語の叙述量増加や描写の誇大化傾向が見られる一方で寂寥感や抑うつ感が語られ、軽躁が弱まると現実検討力のある内省的な物語描写となっていた。これらのことから、両検査における軽躁の影響が異なり、ロールシャッハ法が捉える病理的特徴は T A T には表れず、他方 T A T が捉える抑うつ感はロールシャッハ法には反映されにくいことが明らかになった。臨床像が安定し、軽躁が弱まった状態になると、ロールシャッハ法上に見られた病理的特徴は消失し、それにより両検査間に生じていた「病態のズレ現象」も明確には捉えられなくなると考えられた。

第 6 章では、第 1 章から第 5 章までの結果をふまえ、双極 II 型障害への臨床心理アセスメントとしてロールシャッハ法と T A T を用いると、「病態のズレ現象」と名付けた現象が見られること、これは他の気分障害、統合失調症には生じないこと、そこで、これを指標としてロールシャッハ法と T A T のテスト・バッテリーによる双極 II 型障害の鑑別診断が可能であること、「病態のズレ現象」には「軽躁」の影響が考えられることを提起し、それぞれについて考察した。

以上の論文内容について審査委員会は慎重に審議を行い、次のような問題点の指摘や助言がなされた。①中心的概念として提起された「病態のズレ現象」について、2 つの検査が捉える側面の相違により病態像の「見え」が異なることを意味しているが、説明がないと伝わりにくく、表現として洗練していく必要がある。②気分障害、統合失調症だけでなく、人格障害などとの比較検討もあるとよかった。③テスト・バッテリーについても、他の組み合わせなど可能性を模索していくとよい。

これらは申請者においても十分認識されており、今後研究を継続する中で、さらに深めていく予定である旨の説明がなされた。以上の点を含め本論文は、双極 II 型障害のアセスメントに関する一定の知見を得、臨床心理学的実践に資する研究となった点で評価され、学術的意義があると判断された。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。